

河そひの村

み な み

家主ともやひ井戸ではあるが氣まづいこともないので家主の台所の前の井戸端で顔を洗ふことがいつとなく日課の一つになつてゐる。心もち寢過ごしたと思へばもう家主の縁では野菜賣りやありの實賣りが三四人位たかつてお饒舌がはじまるので勝手口ですます。

今朝は三時頃に目が醒めて井戸端に來た。無花果の實は可なり大きくなつてその下の鳳仙花は二株とも血の様な花片をちらしてゐた。一昨日の午后から出はじめた水は翌朝は川端から十間許り離れた木戸の前まで來てこの井戸の邊は大雨の後の様にびやしびしやしてゐた。今日は川縁へ出る玉蜀黍畑の間の路も乾いて柳の幹に出水のとろをつけて殆ど引いてしまつた。まだ幾分か濁つた水が常よりは少しはやめに流れてゐる。

よく晴れた朝である。それでも海の方からは白い軽い雲がシガラの烟の様に上つてくる。未だ仄白い位なので向の岸の堤の並木は一本づゝ鮮かに水に撮つてゐる。直ぐ足もとにつないだ舟には水がたまつてゐて何かキラキラするものがあると思つたのはまだ月が残つてゐるのだった。昨夕來た時に紅玉が沈んだ様にはればつたい星のがげがうつつてゐたのも丁度そこであつた。

虫の聲は昨夕のままである。一生懸命に啼いてゐる。自分一人でない。仲間の聲に耳を貸してゐるものは一つもないやうである。命がけである。絶対である。「利置場」といつて道を教へる人が便利なものにしてゐる川原の廣場は一番虫の多いところになつてゐる。礫が散らばつてゐる丈で青草は茂るままである。露草の花が寂しく咲いた間々には水引や犬蓼の赤い花が廣場の一面を色どつて杖といふ杖には蔓草がしつこくからまつて小さな白い花がふるへてをる。瓜の花丈が大きく浮き上つてみえる。界隈の子供達は朝の食事をすますと此處で終日あそぶ。母親達も時々出て來て東京から來た女たちの噂をする。早く月の出る頃には月あかりで鬼ごつこもする。鐵橋を潜つて來た小蒸氣は小船を引きながら彼方むかふの岸に沿つて溯つてつゆく。勢

がよいので廣い河の中程まで波が立つ。釜で焚く石炭の火が少しみえて眞黒い人影が動く。二人なのか三人なのか見分けがつかぬ。煙突の煙は眞直に立つ。後に繋いだ五艘の船には角材がギッシリつんである。一番先の船には小さな青い火が螢の様に明滅する。どの船にも一人か二人のつて静かに引かれてゆく。約束されただけの仕事を素直にした人連の魂が召さるゝ時の如く。一面を照らす夕陽の光が川下の方では二三十間離れて船が舶つてゐる。昨夜そこで寝たのであらう。今洗つたらしい襦袢がへさきに干してある。朝飯の用意であらう。煙が立つて昨夜赤い灯のもれてゐた板のすき間から立ったり坐つたりする人影が見える。帆を疊んで片肌ぬぎの女が艫を押しながら下手へゆく船もある。粗朶を満載して川の中央を勢よく下る。裸一貫の男の兒が米を入れた籠を持ち出して長い柄の杓で川水をしやくり入れる。思ふ様にくめぬらしい。柳の下を出て井戸端に引きかへすと左手のもろこし畑ではもう家主の老婆さんが土をかへしてゐる。濁流の乾いた處が白く半分程残つて打ちかへされたチョコレート色の土は息をする様に見える。

裏の小山まだくらい。下の方は家々の炊烟で薄紫にぼかされてゐる。東を負うた山なのでほの紅い空にくつきりと梢の輪廓が見えて親しみのある樹丈は見當がつく一番高い松の樹の下に白い花が返り咲きしているのも見える。井戸端には露を一杯もつた茄子と里芋とが大きな笹の中に入れて置いてあつた。家主の娘は古い桶で茄子の朝漬を洗つてゐる。昨日結つた銀杏返しが少しみだれてゐた。顔をあげて會釋した時に心もち瘦せて見えた。桶の中の茄子の色はいかにもきれいであつた。タオルの端が觸つて鳳仙花がハラハラと散つた。

(市川にて) 三、九、八

駿岡花卉

巖南隔溪爲駿岡。瓦屋櫛比鱗次、長堤蔽之、疎柳綠草、點綴以花卉、有天然野色。風景比墨堤。更覺蒼淡。

(鹽谷岩陰)